

伽藍神・張大帝の像容の比定について

—南宋『鬼董』の記述を通して—

工藤裕司（同志社大学）

張大帝は南宋代に中国江南地方で盛んに信仰された神であり、大権修利菩薩などの他の中国の神と共に、十三世紀に伽藍神として日本に請来された。日本の伽藍神像のうち、制作時期が中世に遡るものには建長寺像・寿福寺像・覚園寺像などがある。これらは三尊の主尊（建長寺像のみ眷属二尊を伴う）から構成されるが、張大帝がどの像に当たるかは定かでない。大権修利菩薩や他の伽藍神についても同様の問題があり、伽藍神像の像容から尊名を特定する必要がある。

本発表では伽藍神のうち張大帝に焦点を当て、宋代の史料からその像容を再検討し、三寺の伽藍神像から張大帝として制作された像を特定する。

先行研究では三山進氏・田中知佐子氏・奥健夫氏らによって伽藍神像の基礎的な研究がなされている。張大帝の髭を強調する中近世の史料が複数あることから、建長寺像のうち髭の植毛痕を多く残す像が張大帝であると指摘される。寿福寺像と覚園寺像に関しては、建長寺張大帝像と同じ姿勢をとる像が張大帝に比定される。沈宏琳氏は二〇二一年『美術史』掲載論文にて、南宋・嘉熙三年（一二三九年）編の『祠山事要指掌集』などを用いて、張大帝は四角い顔・大きな目・髭・頭巾・白地の服が特徴であるとし、建長寺張大帝像の比定について同じ見解を示す。

三寺の伽藍神像における張大帝の比定について、発表者は先行研究の結論と同じ立場をとるが、張大帝の像容を比定する判断基準は未だ不十分であると考え。寿福寺像には髭を有する像が複数あり、覚園寺像の顔の輪郭と目の大きさはいずれも均一に表現される。また、張大帝の姿勢に関する典拠は発見されていない。そのため、従来指摘されてきた特徴のみで張大帝を判断するには問題が残る。三寺の伽藍神像から張大帝をより明確に見出すためには、新たな指標を設ける必要がある。

この問題を解決するにあたって、南宋・紹定年間（一二二八～一二三三年）頃成立『鬼董』に収録される、中国廬山歸宗寺の張大帝の靈驗譚を検討する。建長寺の張大帝は歸宗寺から勧請されたことが元弘二年（一三三二年）『大鑑清規』にみえる。そのため、『鬼董』に記される像容は、日本で制作された張大帝像にも反映されていると思われる。

『鬼董』から張大帝の像容に関する記述を抽出すると、その特徴として「髭」「髻（しょう。道服あるいは外套の意）」「帽」の三点が挙げられる。この三点はいずれも先行研究で張大帝像に比定された像と符合するほか、『祠山事要指掌集』に描かれる張大帝の挿絵にも該当する。三点は南宋代以降に制作された張大帝像に共通して表される特徴であり、張大帝像を判断するための有効な指標となる。

建長寺像・寿福寺像・覚園寺像の各例においてより明確に張大帝像を見出したことで、その他の伽藍神の像容も比定できるだろう。そのうち大権修利菩薩に関して、発表者は南宋代に遡る作例の見通しがあるため、今後の課題として取り組みたい。